

K y u r i z u k a i

新版

窮理図解

2024 November
no.

42

慶應義塾大学理工学部広報誌

<https://www.st.keio.ac.jp/education/kyurizukai/>

English versions are also available:

<https://www.st.keio.ac.jp/en/kyurizukai/>

慶應理工の 美術

アーティスティックな観察眼を培う

外国語・総合教育教室

あら き か み か
荒木文果

(准教授)



「作品ファースト」の観察力と直観で あらゆる角度から美術作品を読み解く

世界が認めるイタリア・ルネサンス美術史研究

新しい価値観が生み出され、社会が大きく変革したルネサンス期の美術史は、伝統ある花形の分野であり、当のイタリアはもちろん、欧米にも膨大な先行研究がある。荒木さんがローマ第一大学に提出した博士論文をはじめとする研究成果は、新たな知見として高く評価されている。荒木さんが「作品ファースト」と表現するその研究方法について聞いた。

著書が高く評価され 「ダリア・ボルゲーゼ賞」を受賞

2022年2月、まだ新型コロナウイルス感染症が収まらないある朝のこと、眠気まなこで開いたメールボックスにイタリアから1通の知らせが届いていた。「……Award」。ジャンクメールの類いと思って危うく削除しかけたところ、「あなたの著作がダリア・ボルゲーゼ賞にノミネートされました。受賞した場合、5月にローマで開催される授賞式に参加でき

ますか」という文面だった。

1965年に始まったダリア・ボルゲーゼ賞は、ローマ研究に対する権威ある国際賞だ。きら星のごとき研究者たちが名を連ねるなか、荒木さんは若手で、かつアジア圏から初の受賞という快挙だった。

受賞の対象となった著書『*Le cappelle Bufalini e Carafa*』は、荒木さんのローマ第一大学における博士論文の内容を含め、それまでの研究成果をまとめて2019年にイタリアのカンピサーノ社から刊行されたものだ。いまだに誰が賞に推薦してくれたかは分からないが、本書が世界各国の著名な大学や研究所などに所蔵されていることも受賞への道へとつないでくれたようだ。

15世紀の礼拝堂壁画が語る真実

研究のためにローマをはじめイタリアじゅうの礼拝堂壁画を観に通ったという荒木さん。日常から一線を画した空間で壁画に向き合い続けていると、作品が語りかけてくるかのように感じられるという。前述の著書に収められている研究成果の一部の概略を紹介しよう。

【1】15世紀のシスティーナ 礼拝堂壁画装飾事業

ヴァチカンのシスティーナ礼拝堂といえば、16世紀に天才芸術家ミケランジェロが描いた《創世記》を中心とする天井画と祭壇壁画の《最後の審判》のある場所として、あまりにも有名である。

一方で、礼拝堂左右の側壁に、15世紀末に当時もっとも影響力をもった4名の画家たちによるフレスコ画《モーセ伝》と《キリスト伝》が残っていることはあまり知られていない。時の教皇がローマに招聘した画家のなかには、日本にも愛好家の多いボッティチェッリもいた。4名の親方たちはひとつの空間で共同制作するにあたり、描き方に関する様々な「取り決め」をし、各工房の弟子たちを率いて分担して仕上げた、というのが従来の見解だった。

これに対して荒木さんはまず、制作順序について、親方を中心とする同じメンバーが、各画面を順に仕上げていったとする定説ではなく、親方たちの《キリスト伝》と弟子たちの《モーセ伝》の制作が部分的に同時並行で進められていた可能性を提示。そのうえで、ボッティチェッリが担当した画面は、親方衆の一人、ペルジーノの様式に対するアンチテーゼとして、激しいポーズを取った人物像が躍動するダイナミックな画風を採用するなど、親方どうしの「取り決め」のなかでいかに画家の個性を出すかが課題であった点も指摘した。15世紀のシスティーナ礼拝堂壁画事業について、画家どうしの競合意識を画面上に読み取る試みはこれまでにほとんどなく、この点が大きく評価された。

【2】ブファリーニ礼拝堂壁画と カラファ礼拝堂壁画

これらはシスティーナ礼拝堂壁画装飾事業の直後にローマで制作され、ペルジーノの弟子ピントリッキオがブファリーニ礼拝堂壁画を、その後にボッティチェッリの弟子フィリッピーノがカラファ礼拝堂壁画を描いた。荒木さんは、



図1 ダリア・ボルゲーゼ賞授賞式
2022年5月、ボルゲーゼ宮殿（ローマ）にて、指導していただいた教授や友人の臨席のもと挙行了された。



図2 カラファ礼拝堂(左)の祭壇画《受胎告知》(下)

聖母マリア(画面中央)から注文主(赤いマントを着てひざまずく男性)が祝福を受けている様子が描かれている。荒木さんは、当時、カラファ礼拝堂があるミネルヴァ聖堂で育まれていた、受胎告知の聖母に対する特別な信仰体系を指摘し、その特異な図像について説明した。下の講義ビデオで詳しく解説している。

アカデミック・スキルズ10分講義ビデオ「美術史を学ぶ」
<https://youtu.be/wDhgEuGxJpo?si=oy-D4besX8la7sfb->



図3 マーブリング作品

せんたく糊と水で作ったマーブリング液の水面に数色の絵の具を垂らし、絵の具が描くマーブル模様を紙に写し取る。絵の具の色や流し方はある程度選択できるが、どのような模様ができるかはお楽しみだ。

両壁画がなぜかよく似ている点に疑問を持ち、2つの礼拝堂壁画を徹底的に比較して、フィリッピーノがブファリーニ礼拝堂壁画を全面的に参照してカラファ礼拝堂壁画を描いたことを指摘した。さらに、この視覚的な類似性の背景には、フランチェスコ会とドメニコ会という、当時のイタリアで勢力を二分していた托鉢修道会どうしの競合意識があったことも解明した。このような両礼拝堂の関係を指摘したのは荒木さんが初めてで、高い評価を得た。

作品が発する メッセージに耳を傾ける 「作品ファースト」の姿勢

荒木さんの研究は作品と向き合うことから始まる。研究の主役は作品であり、それが語っていることを大切に、できるだけ先入観を排除して観察し続ける。

そこから様式分析(どのように描かれているか)、図像学・図像解釈学的検討(作品の意味内容)、壁画の描かれた場所が有していたコンテクストの調査(当時の社会における存在意義)といった観点について、それぞれの作品に合った方法論を用いて考察を深めていく。そうすると、ルネサンス期の光り輝くような壁画

を、当時の人々がどのような思いで受け止めたのか、そのイメージが見えてくる。

カラファ礼拝堂の少し変わった受胎告知図(図2)については、注文主の葬儀の際、まさにこの礼拝堂で読まれた弔辞に、研究の核心となる情報を発見した。500年以上も前の個人的な情報を読み解いていく過程は、時空を超えて旅をするようであり、また「推理小説のようでわくわくします」。

美術史学には、古典的名著や定説とされる先行研究など膨大な積み重ねがあり、欧米の研究者にとっても新しい説を提唱するのは至難の業だ。荒木さんは既成概念に捉われずに、これまで盲点として見過ごされてきた部分に光を当て、次々に新たな事実を導き出してきた。「文化的背景が異なる日本人であることが、逆にメリットになっている部分もあるのでは……」と語る。

アーティスティックな 思考法を共有したい

美術作品は、それぞれに異なった光を放つ。荒木さんは、「作品の魅力を広める伝道者でありたい」と言う。近年では、原稿依頼や共同研究が増え、複数の研究テーマを抱えて大忙しだ。同時に、日本

での著書刊行の準備など、精力的に研究活動が続いている。また、「美術作品は裏切らない」と言う荒木さん。一生懸命問いかけると作品が必ず答えを出してくれるからだ。学生にも、人生の折々に美術作品が支えになるだろうことを伝える。

「作品の声に徹底的に耳を傾ける」研究姿勢をはじめ荒木さんの研究方法は、それ自体がアーティスティックな側面をもつ。そんな思考方法を、学生たちと共有したいと考えていたところ、「マーブリング(図3)」というアート技法を使うことを思いついた。マーブリングはやってみただけで面白く、大学生はもちろんのこと、子どもから大人まで誰もが楽しめる。ワークショップのような形態で、例えば「散歩」や「印象派」など、共通のテーマで制作すると、そのイメージを捉えて、形にしようとするアーティスティックな思考が働き出す。参加者どうして意見交換をすれば、イメージの広がり共有できる。

「私は参加者の思いを引き出すのが上手いと思うのです」と笑顔の荒木さん。美術作品を対象に鍛えた観察力で、参加者の心の声を聴き、個性や可能性を引き出そうとしているのかもしれない。

(取材・構成 平塚裕子)



創作ミュージカルに打ち込んだ経験が 美術史の研究・教育に生きています

理工学部にも所属しながら、日吉・矢上・三田キャンパスで西洋美術史の授業を担当する荒木さん。「ダリア・ボルゲーゼ賞」受賞の快挙を成し遂げた研究や他分野の理工学部生にも人気の講義など、独自の世界を切り開いてきた。その源泉は、ミュージカル創作にあるという。

——西洋文化に興味をもったきっかけはミュージカルだったと伺いました。

中学生の頃に観た宝塚歌劇に感動しました。天海祐希さんや一路真輝さんのようなスターに魅せられたのはもちろん、娘役のふんわりとしたドレスや美しい世界観に心を奪われ、西洋文化への興味が芽生えました。

——高校ではコーラス部で活動し、卒業後、創作ミュージカルを続けたのですか？

高校3年生の文化祭ではコーラス部で『エリザベート』を上演しました。卒業後も活動を続けたいと、OGが創作ミュージカルの活動を始めて、年1回発表会をしていました。慶應義塾大学に就職した頃にその活動は終わってしまったのですが……。

——ミュージカルが研究や教育に役立っているそうですね？

そうなんです。ミュージカルを創作する過程では、お客様を楽しませたいという思いで、細部を作り込んでいきます。この経験は研究で美術作品を観て論文を執筆するときに役立っています。また、ミュージカル制作では、演じるだけではなく、演

技やダンスの指導、練習計画の立案など一座を率いるような役割を任されることも多かったため、実力レベルの異なる部員全員が楽しみながらも高みを目指せるように工夫してきました。この経験は、おおいに授業運営に役立っています。

——イタリア美術史の道に進まれたきっかけを教えてください。

もともと絵画鑑賞や旅行が好きだったのですが、恩師の京谷啓徳先生（当時は九州大学、現在は学習院大学教授）の西洋美術史の授業が本当に楽しかったのが大きいです。先生が私の個性を尊重して、のびのびと研究させてくださったおかげで、自由な思考を養うことができたと思います。

——日本人がイタリア美術史を研究する難しさはあるのでしょうか？

大変なことばかりですが、特に記憶に残るのは、ローマ第一大学に留学して初回の研究発表会で、ある先生から出席者全員の前で「何年イタリアで研究したの？あなたが今話したことは何の意味もなさない」と一蹴されたことです。この発表内容は、のちにダリア・ボルゲーゼ賞を受賞することになる本にも書いたことでした。

——そのような偏見を持たれてしまったのは、研究が認められませんか。どのようにして今があるのでしょうか？

もうローマ第一大学では指導していただけないと感じて、1年くらい大学に行けずにいました。そんなとき、同じ分野の先輩から、ピサ高等師範学校に1年間の奨学金付きの研究環境があることを教えていただきました。そこで美術史学の権威であるサルバトーレ・セッティス先生の指導を受けながら、1年間落ち着いて研究ができました。さらに、ピサでの成果をまとめた論文をセッティス先生が「素晴らしい研究だ」と認めてくださり、続いて、ローマ第一大学で行ったプレゼンでは、（セッティス先生のお墨付きをいただいたこともあって？）担当教官のクルツィ先生も研究を激賞してくださいました。こうして、いったん止まった歯車がやっと動き出し、しだいに博士論文完成への道が開けていったのです。



——研究では「作品ファースト」で、過去の研究成果や常識にと
られすぎないようになさっているのですね？

美術史は作品が主役です。自分が持つ先入観を捨て、事実を
観察することを大切にしています。講義では、このような鑑賞
法をゲームに落とし込み、みんなで訓練します。「意外と面白かつ
た!」「何度もやりたい」と受講生に好評のこのゲームについて
は、ぜひ慶應に入られて、授業のなかで体験していただきたい
です。確実に鑑賞方法が変わりますし、理工学部の学生が実験
結果を分析する際の観察眼にも通じるように思います。

この講義を受けた後、多くの受講生が「以前は、美術館に行っ
ても何を見たらよいか分からず、すぐに会場をあとにしていた
のに、3～4時間かかっても鑑賞が終わらず、気が付いたら閉
館になってしまった」と報告してくれました。とても嬉しく思い
ました。

——講義で心がけていることはありますか？

教育でも、何か思い込みをしないように常にニュートラルで
いようと心がけています。どちらかといえば「みんな大好き」と
いった「博愛主義」かもしれませんね。

論文執筆の端緒は直感にあるのですが、私は研究をする際に、
いわゆる暗記型の知識とは全く違った力を使っているように感
じます。その力を大学時代に少しでも学生さんたちに身につけ
てもらいたいと思うのです。その一環として、講義では何かを
一方的に伝えるのではなく、受講生どうしでアウトプットする
活動を多く取り入れています。

——マッピングを取り入れたワークショップ(研究紹介)にも
先生のそうした思いが詰まっているのですか？

私にとって美術史研究は、苦しさもありますが、結局のところ
楽しくてやめられないものです。そもそも学びは楽しいはず

なので、授業に「遊びの要素」を取り入れています。その際、例
えば、単に「絵を描く」「ダンスをする」という課題ですと不得
意な人にとっては、その時点でハードルが上がってしまいます。
対してマッピングは得手・不得手なく、誰もが満足感を得ら
れやすい手段であると感じています。

現在、慶應義塾大学理工学部システムデザイン工学科の小檜
山雅之教授と共同で“防災×市民科学×アート”をテーマに、持
続的な防災活動の試みを行っています。例えば、防災マップが
「ここは危険」ばかりでは、目をそむけなくなるかもしれません
よね。そこにアートをとりいれ、楽しみながら防災意識を育め
ないかという取り組みです。

慶應の大学生に限らず、国内外の幅広い年代を対象にワーク
ショップを実施する機会をつくってみたいです。今後、一貫教
育校などにもお邪魔するかもしれません。その際は、どうぞよ
ろしくお願いいたします。

◎ちょっと一言◎

学生さんから：

● 学生が書く授業アンケートには珍しく「この授業は受けてお
いた方が良い」と勧められていました。専門知識を持たない私
たちも納得できるような従来の説を覆す新規の発見をされ、考
察されているところが非常に面白いと感じました。

とても優しく包容力のある先生で、先生が作り出す教室の雰
囲気のおかげで学生も活発に意見を出し合っていました。そ
して、先生もグループワークにたくさんのフィードバックをく
ださいました。(2人の講義受講生に話を聞いてまとめました)。

(取材・構成 平塚裕子・大石かおり)

さらに詳しい内容は
<https://www.st.keio.ac.jp/education/kyurizukai/>

美術史研究に用いる力を 多くの若者に身につけてほしい

荒木文果 Fumika Araki

専門はイタリア・ルネサンス美術史。九州大学文学
部美学美術史専攻、同大学院人文科学府藝術学修士
課程を経て、2012年ローマ第一大学ラ・サピエン
ツァ美術史学科にてPh. D (Storia dell'arte)を取得。
2013年から日本学術振興会特別研究員(PD)として
東京大学に在籍。2015年より慶應義塾大学理工学部
専任講師(外国語・総合教育教室)、2022年より現
職。鹿島美術財団「財団賞」(2013年)、「ダリア・ボ
ルゲーゼ賞」(2022年)受賞。



荒木文果の ON と OFF

日常生活のすべての経験が研究につながる

もともと旅行や美術鑑賞が好きではじめた美術史の研究なので、仕事とプライベートの境界線が非常にあいまいなのですが、悲喜交々すべての経験が人生を豊かにし、研究に役立っていると感じます。やるべきこと／やりたいことが多すぎて、思えば、これまで全力疾走してきた感があります。刺激的な毎日をこれからも楽しんでいきたいです。



ローマ第一大学の同期や家族ぐるみで付き合える大学の同僚をはじめとした良き友人たち、理解ある家族に恵まれて、忙しいなかでも一緒に過ごす時間を大切にしています。特に、私と違って(!)とにかく穏やかで優しい夫は、一番の親友でもあり、困った時にはいつでも冷静な意見をくれるので本当に感謝しています。ひととの出会いが人生を形作っていくと実感します。



専門にとらわれず、国内外の美術館に古今東西の作品を観に行きます。旅行が好きなので、海外発表にも積極的になれます。美しい作品や風景に触れる、新しい価値観に出会う、美味しいものを食べる(!)、そのひとつひとつが研究の糧になっていると感じます。



出産・育児で人生が大きく変わりました。出産直後は喜びや感動よりも、人間が体から出てきたという事実には驚き、毎日お世話が必要なので、「たいへん大きなプロジェクトに手を出してしまった…」と思いました。仕事と育児の両立は至難の業ですが、自分よりも圧倒的に大事な存在をもつ幸せをかみしめています。



事と育児の両立は至難の業ですが、自分よりも圧倒的に大事な存在をもつ幸せをかみしめています。

ダンス、ピアノ、ヨガ、料理、フラワー・アレンジメントなど、たくさんの習い事をしてきました。小学校1年生から大学まで通った茶道もそのひとつです。表千家の夏の合宿に参加した際は、あまりに厳しくてトイレに隠れて泣きましたが、茶道の世界観が大好きで、今でも折々に家族とお茶会を開催します。最近は、バレエを再開して体を絞しつつ、お料理教室で美味しいものをいただいています。写真はフランス料理店ル・サンスの渡辺シェフと。



ミュージカルを作りあげてきた経験から得た「お客様を楽しませたい」という思いは、研究・教育のすべてに役立っています。

私の 本棚

My favorite books

●『La Grande Officina. Arte Italiana 1460-1500』

(André Chastel 著 Rizzoli)

パリ大学とコレージュ・ド・フランスで美術史の教鞭をとられたアンドレ・シャステル先生のご著書 *Le Grand Atelier d'Italie 1460-1500* (1965) のイタリア語訳。ローマ第一大学に留学した初年度に、イタリア・ルネサンス美術史の手引きとして読んだ思い出深い本です。言葉の意味を体感するために、本書を持参して言及されている美術作品を見て回りました。フランス語原本や日本語訳(『イタリア・ルネッサンスの大工房 1460-1500』)と突き合わせることで、語学の勉強にも役立ちました。

●『近代絵画史(上・下)』

(高階秀爾 著 中央公論新社)

高階秀爾先生のご著書といえば『美の思索家たち』や『名画を観る眼』などが一番に浮かぶかと思います。そのうえでご紹介したいのが、『近代絵画史(上・下)』です。本書は、私のようなフランス美術史の門外漢にとっても非常に分かりやすく、先生のどの著作もそうですが、美術の解説でありながらそこはかとなく感動をも呼び起こす一冊です。西洋文化を理解しようとする日本人として見習うべき姿勢も感じられ、本書を含めて、高階先生のご著書は何度も読み返しています。

●『白夜行』(東野圭吾 著 集英社)

東野圭吾先生の作品は、情景や人物の描写、物語展開などすべてが緻密で、描き出された世界が眼前に広がるだけにとどまらず、そこにある音、温湿度、触感までもが再現されるような文章力にいつも脱帽してしまいます。人間のダークな側面を描き出す『白夜行』は、読んでいて苦しくなる時もありますが、東野先生のご著書がミステリーという枠組みを超えた真の文学作品であることを証明していると思います。寝不足覚悟でお読みください。

●『変身物語(上・下)』

(オウィディウス 著 中村善也 訳 岩波書店)

西洋美術史を学ぶうえで、『聖書』とともに必読書なのは、ギリシャ・ローマ神話です。古代ローマの詩人オウィディウスの『変身物語』は、神話の登場人物が様々なものに姿を変えていくさまが面白く、私たちがよく知っている戯曲や童話の着想源にもなっています。異教世界のお話ですが、中世キリスト教時代には、キリスト教的に読みかえた『教訓版 変身物語』が著されるなど、西洋思想に与えた影響は計り知れません。

●かこさとし『かがくの本(全10巻)』(かこさとし 童心社)

子育てのなかで、かこ先生の絵本に再会し、こどもの頃とは違う深みを感じています。10巻からなる本シリーズは、こどもの身近な体験を通して科学的な思考へと導くものです。第7巻「なんだかぼくにはわかったぞ」は、〈材質〉の特徴を学ぶものですが、その「あとがき」で先生は、重要なのは暗記ではなく「もっと単純で、もっとおく底の、もっと基本的なもの——科学としての態度、科学のすじみちをこそ貫きたいと念じた」と書かれています。学びは楽しく、身近なものから広がっていくことを改めて思い出させてくれる良書だと思います。

真の文理融合とは？

荒木文果

2022年度から理工学部システムデザイン工学科のアルマザン・ホールへ研究室と協力して、日吉キャンパス北部地域の居心地向上を目指した活動を続けてきました。まず第5校舎跡地に「日吉パビリオン」を建設し、翌年はグリーンズテラス前の広場にオレンジ色の膜材をはって華やぎを加えました。これに関連して、日吉メディアセンター（図書館）でスタディ模型の展示をしたり、これらの活動を日吉キャンパスに関わる学生・教職員に広く公開するための講演会やワークショップも定期的に

開催してきました。その結果、北部エリアの活性化に少しは貢献できたのではないかと思います。また、アルマザン研究室が制作した「日吉パビリオン」が、イタリアの建築専門誌『Area』や『Arketipo』に掲載され、入学してきた1年生が高校生の時から本事業のことを知っていたと話してくれるなど、嬉しい反響もありました。

とはいえ、舞台裏にこそ本事業の醍醐味があるように思います。本事業は、事務の方々にもプロジェクト・メンバーに入ってもらい、それぞれの強みを生かして活動をしています。ミーティングは学生が主体で、めいめいが自由に発言しています。これまでに参加してきた様々な事業のなかで、これほど風通しの良い企画はなかったように感じますし、必然的によい

結果をもたらしています。スペインにルーツのあるアルマザン先生の存在、矢上キャンパスと日吉キャンパスの教員の協働、教員・職員・学生の垣根を超えた交流など「多様性」がこんなにもうまく機能している例はなかなかないように思います。

教育・研究活動に加えて、このような事業を進めるのは時間的にも体力的にも大変です。いつも支えてくださる日吉美術研究室の職員さんと、常に「あと何をしないといけないかしら？」と話しながら、日々目まぐるしく準備をします。それなのにイベントが終わってみると「やっぱりやってよかったね」。イベントの準備もひとつの舞台を作り上げる過程に似ています。結局、舞台の神様にとり憑かれているのかもしれませんが。

理工学 Information

「慶應AIセンター」が開所 次世代のAIをリードする研究センターへ

慶應義塾は、杉浦孔明・理工学部情報工学科教授をセンター長として、「慶應AIセンター」を設立しました。同センターは、AI・ロボティクス研究で世界トップの米カーネギーメロン大学との協定に立脚しながら、産業界とも連携をして次世代AI技術の研究を推進すべく設立されました。

2024年9月24日には開所式が行われ、キャサリン・エリザベス・モナハン駐日米国臨時代理大使をお招きし、研究に参加するメンバー企業^{ことほ}の代表者などが一堂に会し、同センターの開所を寿ぎました。



慶應AIセンターについての詳細は、
下記のプレスリリースをご参照ください。
[https://www.keio.ac.jp/ja/press-releases/
files/2024/9/24/240924-4.pdf](https://www.keio.ac.jp/ja/press-releases/files/2024/9/24/240924-4.pdf)

編集後記

今号の表紙は、荒木准教授のたっpegのご希望により、《モナ・リザ》を題材とした活人画になりました。撮影に際しては、当然《モナ・リザ》の画像と見比べながら准教授にポーズをお願いしました。その過程では、《モナ・リザ》のモデルは意外と^{かつぶく}恰幅がいい、手の椅子への掛け方はこう、正面を向く角度はこれくらいなどと、対象の観察ならびに描写の言語化を自然と繰り返していました。撮影が終わるころには、《モナ・リザ》の今まで気にも留めなかった細部が浮き上がるように知覚されていました。インタビュー記事で先生が言及されていた鑑賞法の効果を図らずも実感するとともに、先生が取り組まれている研究のごく一端を垣間見た気がしました。

(杉原 史)

今号の表紙：《モナ・リザ》の活人画風に。

新版 窮理図解

No.42 2024 November



編集 新版窮理図解編集委員会
写真 邑口京一郎
デザイン 八十島博明、石川幸彦 (GRID)
編集協力 サイテック・コミュニケーションズ
発行者 村上俊之
発行 慶應義塾大学理工学部
〒223-8522 横浜市港北区日吉 3-14-1
問い合わせ先 (新版窮理図解全般)
kyurizukai@info.keio.ac.jp
問い合わせ先 (産学連携)
kll-liaison@adst.keio.ac.jp

web 版
<https://www.st.keio.ac.jp/education/kyurizukai/>